

## ディスカッション

倉阪 秀史（千葉大学人文社会科学研究所教授）：原先生、中口先生、非常に勇気付けられる、あるいはこのプロジェクトに対して次の展開を具体的に示していただけるコメントをいただきまして大変感謝しています。

原先生のフューチャーデザインの研究については、かなり同じ考え方で進められているというように本を読んで感じたわけですが、今回、われわれの研究とまた違ったアプローチで、未来世代の役割を含めたロールプレイングが進められているということをご紹介いただきました。原先生からは、「デタッチメント」というキーワードをいただいたと思っています。われわれは職業や生活のしがらみに取り込まれてしまっていない世代として、「エントリー世代」である中高生をねらっているのですが、「デタッチメント」ができれば、またいろいろな可能性があるのではないかと思いました。デタッチメントが本当にできるのかどうかそのあたりさらに原先生にお聞きしたいと思います。

それから中口先生からは、ワークショップで出てきた提案をシミュレーターに入れて、それをまたフィードバックするというように、インタラクティブにやってはどうかというご示唆をいただきました。われわれのシミュレーターはエクセルで動かしていますので実現可能性はあるのですが、現状ではIT技術が若干かけていまして、即時に対応できない状況です。ただ、複数回に分けてワークショップを行って、その間にシミュレーターを回して結果を報告する方法であればできるかもしれません。これも大変有意義なご示唆をいただいたと思います。

原先生、そのデタッチメントについて実際に高齢者の方はできるのかどうか、そのあたりをお話伺えますでしょうか。

原 圭史郎 (大阪大学環境イノベーションデザインセンター特任准教授) : 先ほども述べました通り、全ての世代が「自分は負担をしたくない、変化ではなくて現状維持がいい」ということを主張しますと、持続可能な社会は導けないということになります。これが、フューチャーデザインが必要となる所以です。先ほどは気候変動の例でそれを説明しました。将来世代のために自分たちの世代が我慢する、負担する、という意味決定ができるかどうか、がポイントとなります。今の社会システムの根幹である、市場や間接民主制の下ではこのような意思決定は容易ではないように思われます。現在の間接民主制の下では、例えば選挙の際に、100年先の人のために想った政策を全面的に主張したとしても、当選するかというと、なかなかそのようにはならないでしょう。現実社会の仕組みの下では、将来世代に資する意思決定や行動は容易ではない、ということになります。

そうなりますと、将来世代の利益を代弁する役割をきちんと担うことができる人を仮想的にも創造することが大事だろうということが、我々の発想の原点となります。将来世代を代弁するということは、自己利益や近視性を克服した意思決定、すなわちデタッチメントができるかどうかポイントとなりますが、矢巾町や大阪府吹田市などで進められているフューチャーデザインの討議実践からは、高齢者の方々も含めて、仮想将来世代グループの方々には、このような判断・意思決定を行うことができることが分かっています。なお、矢巾町での参加型フューチャーデザインの討議結果については、今政府が進めている「地方創生」プランの中に入れていくこととなっています。

また、経済実験を通じて、明確に将来世代の代弁者としての役割を与えることによって、人は自己利益や近視性を越えた判断・意思決定を行う能力があることが分かっています。この点については、実験を行われた、共同研究者の一人でもある一橋大学の西條辰義先生にお話いただくのが一番良いと思いますが、簡単に言いますと、被験者を集めた経済実験において、仮想将来世代を含むグループが、自己利益を抑えてでも、将来世代に対して資源（この実験の場合は、実験参加後に持ち帰ることができる謝金の額となります）を残そう

という意思決定・合意形成を行う能力があることが分かっています。

役割を明示的に与えられることで、高齢者の方も含めて、人は将来世代に資する意思決定や判断を行う能力を有することが分かってきたのですが、仮想将来世代が安心して役割を果たすことができるような社会的な仕組みも必要となります。すなわち、フューチャーデザインを社会実装していく上では、仮想将来世代と現世代との間の熟議・討議の方法論と共に、仮想将来世代の役割を支えつつ、フューチャーデザインから生まれたアイデアが適切に政策立案にも反映されるような仕組みや制度、その二つを発展させることが必要と考えています。これらによって、社会の中で、将来世代にも資するような意思決定や行動が支えられる基盤が整うのではないのでしょうか。

倉阪：ありがとうございます。では、栗島先生お願いします。

栗島 英明（芝浦工業大学工学部准教授）：私もいろいろな調査をしますが、実際に将来世代を代表して代弁する人たちがいたとして、いわゆる経済学実験上はそのような人を入れ込むと、ある程度意思決定が変わってくるというところはおそらくそうなのだろうと思います。しかし一方で、やはり実際の痛みというものを背負う時に、それがいわゆる理想ではなく実際の痛みを背負うときに、先ほど選挙で100年先の事をうたえても当選しない話がありましたが、経済学で言えば、例えば支払意思額のようなものは、実際の支払いよりもおそらく多めに出てくるようなところがあると思います。それは実際に支払う痛みがないからで、だからそこはある程度理想的というかある程度かっこつけも含めて、社会的に最適な支払意思額を言いますが、実際に支払いを求めてみると、なかなかそれは難しい。そういったことを考えると、実際のデタッチメントの意思決定やアイデアまではおそらく出てくるとは思いますが、それを実際に実現する、実際にそれを社会の中で実施していく際には当然議会を通さなければいけないなどになると、今度は議会自身が本当にその意思決定ができるかどうか非常に難しいと思います。その点は何か仕掛けなどはありますでしょうか。

原：ありがとうございます。ここでの経済実験では被験者が持って帰る金額が実際に減りますので、結果から見ると、みなさんある程度は（持ち帰るお金が減るとい）痛みをおしてでも、次の世代のことを考えた意思決定をされた、ということだと思います。

実験に参加された方は若い方々が多いのですが、彼らがいわゆるプロソーシャル（Pro-social）かどうか、という点についても実験の直後のアンケート調査で確認しておりまして、その情報を勘案した上で実験結果を解釈しても、仮想将来世代創出の効果があつた、すなわち、仮想将来世代が創出されることによって、次の世代のことを考えた意思決定がなされた、と結論づけられます。

また、実際の討議からは、先にも述べましたように将来世代の利益を代弁する役割を与えられた仮想将来世代と、現世代とはアイデアや政策・施策の優先順位が異なる、ということが分かっています。この違いはある意味で世代間の利害対立、あるいは優先順位の差異、だと見ることができます。最終的には、双方が交渉・合意形成をすることで、将来世代のことも考慮した上で、最終的な合意形成案が導かれる、というのがフューチャーデザインの重要なポイントです。

もっとも、実際にフューチャーデザインを社会実装していく段階においては、色々な観点を検討していく必要があります。例えば、フューチャーデザイン討議に参加する住民の人たちはどのように選ばれるべきか、という点です。この点についても、自治体関係者と共に研究を進めています。例えば、ミニパブリクスの考え方にもあるように、無作為抽出によって、参加住民の方々が選ばれるような仕組みも考えています。仮に自治体に将来課・将来室というセクションが設けられることになると、参加型フューチャーデザインで生まれた政策・施策案が、これらのセクション（将来課・将来室）での政策づくりにも部分的あるいは全面的に反映されるという、透明なプロセスを作る必要があるかもしれません。もちろん、現在の仕組みのものとは、最終的には議会で意思決定がなされますが、このような透明な意思決定プロセスの仕組みが実装されれば、議会の皆さんも、将来世代の視点を持たれた判断を少なからずされることにな

るのではないのでしょうか。ただし、フューチャーデザインを、例えば自治体での意思決定のプロセスの中で位置付けていくためには、段階もありますし、検討すべき課題も色々あります。これらの点は、現在丁寧に検討しているところ

倉阪：今社会的な仕組みの話があったので、会場に、プロジェクト 2100 推進法案というものをお配りしました（本巻 pp. 310～317「資料」参照）。私は法案作成講座というものを毎年やっています、今年は、将来世代のことを考える社会的な仕組みを導入する基本法を作ってみました。昨年、つまり 2014 年に生まれた女の子の赤ん坊の平均寿命が 86 歳を超えてきました。昨年生まれた赤ん坊は平均して 2100 年まで生きることになりますので、政治は、22 世紀 2100 年を考えて意思決定を行うべきだと考えます。まだ見ぬ将来世代の意見を反映する仕組みとして、法案の 36 条には、10 歳に達した国民は国及び地方公共団体に対して次世代的課題に対応しなければいけない施策に対して意見を述べるができることとしました。中口先生のご報告にありましたが、やれる子供もたくさんいると思います。われわれのプロジェクトは中高生ということで 10 歳より少し上ですが、その辺りのある程度もう判断能力がついてきて将来のことを考えるような世代に「もう意見を言えますよ」ということを言ってあげることで、そのような感覚を育てて、将来世代の声を生にリアルに育てるというアイデアです。7 世代先のことを代弁する人を作るのはなかなか難しいのではないかと、それよりはまだ染まっていない若い世代に発言してもらう方がより具体的で実効性があるのではないかとというのが私の感覚です。この点が、フューチャーデザインのプロジェクトとわれわれのプロジェクトの少し違うところだと思いますが、方向性としては同じだと思います。

宮崎 文彦（千葉大学人文社会科学特任研究員）：熟議という言葉拾っていただいて非常にありがたかったです。フューチャーデザインでやっているワークショップで私が非常に感じたことは、実際に将来世代の利害を代弁、

これはおそらくリプレゼンテーションですよ、代表性があるかどうかということの問題より、そのようなことを考えた人々が発想として新しい発想が出てくるといえることがとても大事なことでないかと感じました。

社会最適性という言葉が出ましたが、私がやっている公共性とまさに同じことだということを非常に感じていて、そういった公共的な発想、自分の私的な利害から物事を考えるのではなく、もっと公共的な発想が出てきて、それが意思決定に活かされるというところに非常にいいところがあるのではないかと感じました。

結局リプレゼンテーション、代表制がなぜ問題になるかといえば、先ほどもお話がありましたが、どのように意思決定に繋げていくかというところがやはり問題であるわけですが、新しい発想が出てくるといって自体が非常に大事です。それを拾ってもらえれば良く、私たちの場合は、小出市長が実際に活かしていけるようにがんばりましょうとおっしゃって下さいましたし、それから私自身も市原市の議会の方で報告をさせていただきましたが、やはり報告をすると議員さんたちは非常に関心をお持ちで、特にご自身が専門にしている分野ではどのような提言が出たのですか、という質問が相次ぎました。そのようなかたちで新しい発想が出てくれば、そのように拾ってくれる人がいて、それが自治体の意思決定プロセスに反映されていく、これだけでもやはり随分変わってくるのではないかと感じました。代表制ということに関して何かあれば教えていただきたいと思います。

原：私自身は「社会的装置」と呼んでいますが、フューチャーデザインを実装するための社会的な仕組みや制度をしっかりと作る必要があるのではないかと考えています。例えば、将来課や将来省という組織もそのような仕組みの一つです。将来世代を代弁する役割を担う人材や将来世代に資する政策を考えられる公共人材などが、積極的に役割を果たせるような仕組みや組織が必要と考えています。我々は、フューチャーデザインにおいて住民参加の取り組みを重要視していますが、社会的装置開発の議論の中で、フューチャーデザインの討議

にはどのような人に参加してもらうのか、どのような人たちがきちんと将来世代の代表者となりうるのか、ということも検討課題として挙げているところです。多様な世代の人が参画できるようにすることが大事だとも思っています。

先ほど、年配の方々の発想は、若い人たちと比べてどうか、という質問が出ましたが、実は私のこれまでのフューチャーデザイン討議に参加した経験からは、年配の方々はむしろ非常に豊かな発想をされるように思います。データコメントがむしろ起こりやすいのかもしれませんが。いずれにしても、年齢や所得、仕事、子供さんがおられるかどうかなど、個人属性に応じて、発想やデータコメントの程度も変わってくると思われしますので、この点も踏まえ、現在属性と発想の傾向との関係についても分析をしています。そのような研究結果も踏まえながら、どのような人たちが将来世代を代弁すべきか、代表制のあり方を当然考えていかなければいけないと考えています。

倉阪：ありがとうございました。中口先生これまでの議論をお聞きになって何かご意見ありますでしょうか。

中口 毅博（環境自治体会議環境政策研究所長）：ひとつは、私の関心はもちろん若い世代の代表ということで、その子達が未来を描くということはあるのですが、結局そのような有能な人ほど例えば内子町の例ですと、やはり内子町の外に出て行って、実際には外で活躍しているので、それよりも前にやはりそのような子達に戻ってもらえるような環境をいかに作るのかということ。加えて、そういうことを期待する前にやはり、先ほどの矢掛町の例のようにその世代が地域を作っていくということです。それなら今すぐ出来るので、そのようなところに実際には関心があるということがひとつ。

それからもう一点、現在私が関心があるのは、子育て世代にどのように参加していただくかということです。この1年くらい内子町の中で急にママ友がたくさんできて、やはり子供と仲良くなるとそこから繋がりができるようになりました。そうすると、ママ友は普段何を考えていてどのような世代と

付き合っているのか、行動範囲などがよく分かります。そうすると、地域の課題もよく見えてきますし、その人たちのニーズも分かってきています。もちろん内子町に関していろいろな情報を共有しながら、ここでお互い成長しながらということも考えられるわけですが、それが無理な場合も多いので、ママ友の人たちにそれをお願いしても子供の世話があって無理なので、こちらから出かけて行ってその場を作って、地道にその人たちの考えを聞くようなことを長い時間かけてやるということに、現在私の関心が向かっています。

**倉阪：**ありがとうございました。子育て世代はかなり重要です。このプロジェクト2100ということを言い始めたのも、赤ん坊を産む卒業生がたくさん出始めて、その赤ん坊を見ていると、そこが将来の象徴のような気がしたからです。その子育て世代が出て来ることができないことになると、そこはこちらから出て行く必要があるというお話しをいただきました。大体こちら側は一巡しましたので、会場を含めて残りの時間でさらに議論をしていきたいと思います。

**松橋 啓介 (国立環境研究所社会環境システム研究センター室長)：**国立環境研究所の松橋です。将来世代を代弁する人を入れるということは、公共的な視点を考えるようになったり、中長期的なことを考えるようになったりするために非常に重要なキーだと思いました。

先ほど誰が代表するかという話がありましたが、例えば将来世代を代弁する人が例えば1割いたとして、それは全体の意見の中で1割に過ぎないということではなく、やはりもっと大きなインパクトがあるものになると思います。ひとりひとりの人が自分勝手に自分の世代だけが良ければいいという決定をするのか、あるいはより中長期的なことを考えて決めるようになるのか。共感ももう少し広がるのではないかと考えています。知らなければ知らん振りをして好き勝手な投票をしたり発言をしたり決定をしたりできると思います。しかし、やはり将来世代の意見を見せられると、どうしてもそのような決定はできなくなるということをもう少しクリアに、実験でも出していけるとおもしろいので

はないかと思いました。どのように広げていくかというところに今関心があり、いろいろと考えさせられました。

ひとつだけ質問というかこのような可能性がないかと思ったことがあります。マスコミや議会などはそのような将来世代の意見を気にするのではないかと考えていて、特に未来ワークショップもマスコミの方が関心を持ってくれた理由は、そのような視点が大事だと思いつつもなかなかそのような報道ができていないということもあるのではないかと考えています。社会としてそのようなものを広めるには、マスコミが、これは中長期的に大丈夫なのか、公共的にどうなのか、ということのを常に報道の視点で見ることが重要だと思います。マスコミの人たちがその視点を持つために、何かトレーニングやワークショップなどができないかと思いましたが、そのような議論がないか原先生に伺いたいと思います。

原：前半におっしゃったことについては、私も同様に考えています。現代の人たち全てが将来思考を持つ必要はないと思います。社会の中には多様性を持つことが大事であって、いろいろな思考を持つ人がいるのが自然です。一方で、例えば吹田市で考えますと、人口は36万人程度ですが、そのうちの数%でも、将来のことを慮った思考を持てる人たちが出てくる、あるいはそのような考え方の人たちの意見やアイデアが自治体の政策に反映されるようになると、社会的にも大きなインパクトがあるのではないかという風に思います。

一橋大学の西條先生とは、将来のことを考えるような練習・プラクティスが小学校や中学校の授業にカリキュラムとして導入され、大学にも将来学部が設置されるような社会では、フューチャーデザインを支える人材が大きく育つのではないかと、という話をしています。将来学部を出た人は、就職先として、役所で言えば将来課というパスができるかもしれませんが、企業の将来ビジョン・構想を考える専門的なセクションで仕事をする、というような状況もありうるかもしれません。そのような一連の流れが出来ていくことも大事だと思います。

それから、2点目のマスコミに関連する話ですが、今述べたような社会の流

れやパスが出てくると、当然マスコミもそのよう流れに反応することも予想されるので、結果的に相乗効果が生まれるかもしれません。少し違う文脈かもしれませんが、イメージの重要性はおさえておく必要があるかと思います。関連して矢巾町のお話をしたいと思います。矢巾町では、水道ビジョン作りを長年住民参加型で進めてこられました。今年はそのような長年の取り組みが評価されて、日本水道協会から水道イノベーション大賞が授与されました。参加住民の中には水道のことは全く分からない方々もおられたそうです。最初のころは、「水道は出て当たり前」「水道料金を値上げされると困る」などの発言も多かったそうですところが、討議を進めていく過程で、水道管の劣化の状態を写真で見せるなど、現実に関わる情報やデータを共有されたところ、参加住民の方々も「このままではいけない」という風に気づかれたそうです。「これだけ水道管が劣化しているのであれば、今後これをどのように改修していくかを真剣に考えねばならない」ということを感じてこられたのだそうです。ここでの例は、写真イメージですが、ある意味でそのようなイメージのインパクトは大きいのだと思います。住民参加型の議論を進める中で、客観的かつ科学的な情報を提示することが重要なのは言うまでもありませんが、現実をきちんと見てもらうこと、正しい、そして客観的な情報やイメージを提示することは重要であり、その意味ではマスコミの役割も非常に大きいだろうと思います。

倉阪：ありがとうございます。

大石 亜希子 (千葉大学法政経学部教授)：千葉大学の大石です。先生方が終わりの方でいろいろとご指摘になったことに関連しますが、将来世代のことを慮るといって、自分の効用関数の中に将来世代のことが入ってくるようなことだろうかと思いますが、例えば海外の研究では、児童手当を世帯主につけるか実際に育児をしている人につけるかで世帯内での子供に対する消費の量が変わるという結果があります。そうになると、慮るバロメーターに性差があるということなのか、それとも家庭内のいろいろな資源保有の違いでそうなっている

のかという問題もあるかもしれないと思っていました。そのような状況も考えてみると、例えばエントリー世代に注目してしまうというやり方は、ジェンダー差の軽減がないままでその人たちの意見を求めてしまうという意味では少し問題があるのかもしれないと思います。大学を出て就職する時になって、女子学生は世の中の男女差別などを意識するというのが大体のパターンなので、その意味では中高生に代表制を移動するのもやや危ないところもあるのではないかと思います。また、自治体で進めていただくにしてもやはり、そのうち議会ということになるとと思いますが、議会での女性議員の少なさは日本全国そのような状況なので、その意味でも少し問題があるのかもしれないと思いました。

中口先生と栗島先生にお伺いしたいと思ったのは、そのようにいろいろな工夫をされて、地域の良さを発見することも考えられたいしてありますが、例えば地域の社会関係資本の良さやあるいは住民同士が密接に知り合っている、祖父母との関係が強いなど良さとして評価されているものが、実は女性が都会へ流出する原因になっているなど、地域によっては例えば〇〇さんのお宅のお嫁さんとはしか見られない、というようなこともあるのかもしれない。見る主体によって違って来る、裏腹になってしまう面もあるのではないかと感じていますが、それを残った人たちに聞いてしまうと、出て行った人の意見が聞けないというサンプルバイアスがかかってしまうと思いますが、そういった問題については、先生方はどのようにお考えかお聞きできれば幸いです。

**栗島**：社会関係のマイナスの側面は当然あります。今お話がありましたようにジェンダー的なものもありますし、関係が密であるがゆえにプライバシーの問題があったり、(すぐに知れ渡ってしまうために)非常に立ち入った話ができなかったり、そういったところが当然あると思います。

ただし、今回われわれはまずネットワークの効用というかたちでプラス面だけを見よう、もちろんマイナス面があることは十分に承知した上でプラス面を見ようということをやっています。もうひとつは密度の濃い繋がりだけではなく、密度の薄い繋がりというものをもう少し掘り出したい。先ほどご報告しま

したように密度の薄い繋がりであっても実際にはさまざまな効用を生み出しているわけです。

どちらかというところ現在の地域のコミュニティ政策自体が、昔ながらの密なコミュニティをよみがえらせようとするような方向なので、われわれはそうではない「つながり」も評価しようと考えています。地域内のコミュニティとか、地域の外との繋がり、といった分類は一旦置いておいて、「誰でもいいのでつながっているか」というところを取り上げようと考えています。われわれが聞いているのは、地域の中や家族だけではなく、地域の外の人（出て行った人なども）も含めた人と人との繋がりであり、濃い繋がりだけでなく薄い繋がりも含めて、それを地域の資源として考えていこうということです。密度の濃い地縁的な地域コミュニティ、それが重要な部分もありますが、そこだけにこだわっているとご指摘のようなマイナス面も出てくるし、「そういったつながりがいい」と言いながら本音では「それは面倒くさい」と思っているところまで、この座談会の中で聞き出していければということも考えています。

ですから調査対象についてのご指摘についても、対象が今そこに住んでいる方という意味ではそうなのですが、その人のその地域の中ではない、あるいは家族の中ではない繋がりをごどのようにピックアップしていくかという意図をもって現在調査を進めているところです。

**中口：**先生のおっしゃる通りで、内子町に関して言えば、外に出てから戻ってきたのはなぜか内子町の人に聞く機会があれば聞いていますが、そのうちぜひ内子町出身の内子町の外にいる人たちを呼んで、場が持てたらと思っています。それが一点です。もう一点は、最初におっしゃったことですが、内子町の中でいろいろな世代の方に聞いていると、例えば70歳くらいの人に聞くと内子の人間関係の嫌なところは勝手に人の家に入ってきて冷蔵庫を開けて勝手に物を食べているというようなことを言いますが、では30代くらいの人に聞くと、そんなことはないと言います。やはり時代とともに地域の中の繋がりのかたちも変わってきているので、昔ほど家長制度のように家に縛られる、地域に縛ら

れるようなかたちでの繋がりは徐々に薄れてきているのではないか。今の人たちは今の人たちなりの繋がりのしかたを地方の農山村であっても見出しつつあるのではないかと思います。ただ、そうはいいってもおっしゃるように都会の匿名性には及ばない部分はやはりあるので、それが嫌な人はやはり出て行くと思います。

倉阪：ありがとうございます。大学生もこの中にいますが、コメントなどありますでしょうか。

学生：千葉大学法政経学部1年の小西拓磨です。フューチャーデザインに関して質問があります。市のステークホルダーは確かに将来世代であって世代共創が必要だと思います。将来世代の代弁者グループを世の中に作っていくということで仮想将来世代というものを作られると思いますが、その仮想将来世代を作っていくにあたって、地域資源と長所に留意してデタッチメントを行うとすると、極めてドメスティックな考え方になってしまうのではないかと思います。この仕組みで隣の市や県について議論を発展させていくことはできるのでしょうか。

原：まず、仮想将来世代が地域資源や長所を伸ばすという長所伸長型の発想をされる、ということはフューチャーデザインの討議結果を我々が分析した結果見えてきたことです。仮想将来世代の皆さんには、将来世代の代弁者となっていただくように明確にお伝えしますが、結果的に、どのような議論をされるかはもちろん、我々も討議が終わるまでわかりません。今日は時間の関係もあって、説明はできませんでしたが、討議の前には、住民の方々へのインストラクションがあります。そこで、将来世代を代弁するというはどういうことか、という点について仮想将来世代グループの方々と一緒に共有します。

矢巾町では、仮想将来世代と現世代グループが将来ビジョンの議論をする前に、過去の振り返りを行うためのセッションも一度実施しました。矢巾町での

フューチャーデザインでは2060年の、つまり45年先の矢巾ビジョンを作っていますので、過去の振り返りセッションでは、45年前の1970年のころから現在までの変遷を評価しました。1970年といえば大阪万博があった年です。そのときから現在まで何が変遷してきたのか。変わったものは何か、変わらなかったものは何か、ということを含めて議論しました。そこでみなさんが、矢巾町にとって普遍的な価値を持つ地域資源についても色々と考えを持たれたのではないかと思います。

仮想将来世代は、長所伸長型の議論をする傾向にあるとお話しましたが、それに加えて、社会最適性も重視した思考を持つ傾向もあります。例えば、これまでの討議を見ていますと、社会最適性の観点から「役割分担」の発想が出てくることがあります。例えば、2060年のビジョンづくりにおいて、矢巾町だけで全ての施策を実施するのではなくて、隣の盛岡市と役割分担をして、矢巾町では、田園風景や農業などの資源を活かしたまちづくりに特化すべきだ、という意見が出てきたりします。このような討議内容を見てみますと、内向きな発想というよりも、むしろもう少し社会全体を見回した上で、矢巾町としては何を行うべきか、といった議論を展開されているのは、大変興味深いことと思いました。

倉阪：ありがとうございます。フューチャーデザインの原先生からわれわれのプロジェクトに欠けているところをいろいろと教えていただいたように思います。特に響いたのは、2060年にいないからこそデタッチメントができるという、高齢者はしがらみにがんじがらめになっているような受け止め方ではない、違った見方もいただきました。会場の大石先生からは中高生だけに依存するのは危ないのご意見をいただきました。私もそのように思っています。いちばら未来ワークショップを経験して中高生の発想の限界も感じています。そういった面で他の世代のワークショップも併せた上で、まさに多世代共創で考えていく仕組みに育てていくべきだということも思いました。今後ともお互いに交流をしながら進めていければと思っています。中口先生からは現場、特に地域に

## ディスカッション

入っていろいろな関係を築かれた経験に基づくご意見をいただきました。われわれも、できる限り地域に入って行ってこの研究の中身を伝えていけるように努力して行きたいと思います。本日は会場のみなさまも含めて今回公開ワークショップに参加していただきまして本当にありがとうございました。今一度拍手を持って終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

**司会：** これをもちまして本日のワークショップを終わりにします。